

日本人と中国人の発想、価値観、物事の処理の仕方、 日本語と中国語 **こんなに違います！**



CHINALINGUA SCHOOL
PRINCIPAL
チョウ リン カ
趙 玲 華

日本と中国は歴史や自然環境が違う事によって両国人民の発想、価値観、物事の処理の仕方などが大きく違います。それだけではなく、人類の知恵の最高結晶である両国の言語、中国語と日本語も、その性質は大きく異なります。

1.中国語と日本語の違い

ここ数十年、中国の改革開放と経済の発展に伴い、中国語が商業活動の中で段々と重要な役割を果たすようになり、日本人の中国語学習者も日増しに増えて来ています。ここでは言語比較学の角度から、中国語と日本語がどのように違うかをちょっと紹介し、皆様の中国語の特徴を認識するためにすこしでも参考になればと思っております。

言語の三要素は発音、文法と語彙です。中国語と日本語を比較すると発音と文法の二要素は完全に違います。日本語と中国語の共通点といえば、同じ意味を持つ漢字単語ぐらいです。ですから、日本人にとって中国語の学習は漢字が分かると言いながらも、実は全く違った新しい言語へのチャレンジなのです。まず、発音の面から言うと、日本語は五十音図表にある50個の音、更に拗音(しゃ、しゅ、しょなど)と撥音を加えてもわずか100種類に過ぎの少ないですが、中国語には21個の子音、38個の母音、400近い音節があり、更に各音節に四つの声調(アクセント)があるので全部で1600種類の発音があります。よって日本人にとっては、この1600個の音をマスターする事は至難な作業となります。ですから発音を勉強する時、先生やテープの発音のマネだけではきちんと把握できない音があるので、必ず個人に合わせた発声法から徹底的に指導して貰う方が良いと思います。中国語の経験者なら誰でも知っていますが、最初の段階で発音をしっかりマスターしておかないと、学習内容が進めば進むほど、会話をするとき通じない割合が増えてしまいます。

日本人にとって中国語の発音の勉強においてはやはり四つの声調(高低のアクセント)の把握が一番難しいのだと感じます。四つの声調をきちんと把握する為には二つのコツを覚えるほうが良いと思います。一つは第一声から第四声まで順番に声を出して練習する事です。そうすると自然にそのリズムに馴染むようになり、その高低の具合を上手にコントロールできるようになるのです。もう一つのコツはその四つの声調のリズムに近い日本語のリズムを知る事です。母国語にあるリズムと比べながら覚えていくのが近道

の一つです。日本語と比較して、中国語の四つの声調は日本語の以下のリズムに近いのです。

第一声 …第一声は高平調です。 高音で平らに伸ばします。

ちょうど病院で喉の検査をする時に出す「あー」のような音調です。

第二声 …第二声は上昇調です。 始めは低く出して、その後一気に上げます。

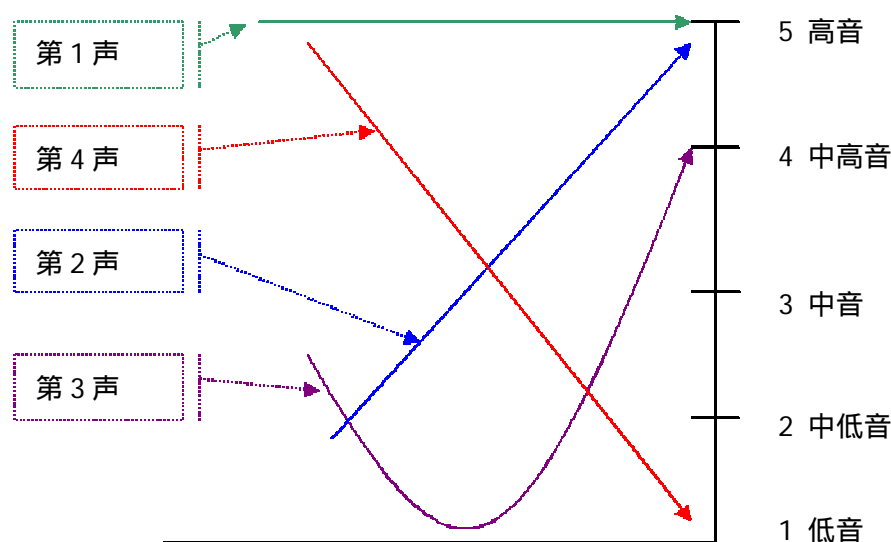
強い疑問を持った時に使う「ええ↑ なに？」と言う時の「ええ↑」のような音調です。

第三声 ……第三声は中へこみ調です。 いったん下げてからまた上げます。

ちょうど「いい↓え、違います。」と言う時の「いい↓え」のような音調です。

第四声 ……第四声は下降調です。 始めは高く出し、その後一気に下げます。

ちょうど「さあ↘ 行きましょう！」の「さあ↘」のような音調です。



文法の面から分析すると、中国語の文の基本構造は「独立語構造」であり、独立した一文字一文字で文を構成し、文の意味を左右します。中国語には助詞や助動詞がありません。よって中国語の単語はテンス（時態）や品詞によって変化しないのです。即ち、形容詞、形容動詞、動詞、及び助詞の語尾変化や活用がありません。文の意味を左右する点においては、語順が極めて重要な役割を果たしています。即ち、単語の位置が変わることによって、その文章の意味が変わったり、また通じなくなったりするのです。一方日本語の基本構造は「粘着語構造」で、各単語・成分の後ろには必ず助詞や助動詞が付いていて、助詞や助動詞がその主要成分の役割を補助します。文の意味を左右するには、

単語だけではなくて、単語をつなぐ助詞と助動詞が不可欠な役割を果たしているのです。むしろ文の意味を左右する点においては、語順よりも助詞と助動詞の役割がずっと大きいのです。

語彙の面から言うと、中国語の語彙は全部漢字であるのと対照的に、日本語には平仮名、カタカナと漢字三種類が混じています。よって、日本語が分からない中国人にとっては、日本語の漢字単語がわかってても文法構造が違う事で、全体の意味をきちんと把握出来ないのが普通です。例えば日本電池の取り扱い説明書の「充電式ではありません」の文を見ると、中国人は平仮名の「ではありません」が分からないので、絶対に漢字だけの意味を取って「充電式」電池だと理解します。それから中国語の本来の意味から大きく外れた日本語の漢字単語を見て、中国人はしばしば誤解を招きます。例えば、初めて日本の地に足を踏み入れた中国人はあっちこちに掛かっている「麻雀屋」の看板を見ると、日本人はもの凄く「雀」を食べるのが好きな民族だと思いこんでしまいます。なぜかと言うと、中国語では「麻雀」は「雀」の意味だからです。そして中国人の日本語学習者にとっては、日本語の発音はたいした問題ではありませんが、常に頭を悩ませるのは、日本語の助詞と敬語の使い方だと思います。

中国語に限らず、外国語の学習はビルを建てるのと似ています。発音が基礎の土木工事、文法が躯体工事、単語やフレーズは建築材料です。この中で、学習者が（辞書などを使って）自分の力である程度まで用意できるのは、建築材料（単語・フレーズ）だけで、あとは先生を通じて学ばなければなりません。初心者が、最初いきなり外国語で発音や文法を学ぶのは、徒歩で遠い旅行に行くように無理があることなのです。

日本人学習者の場合、先生の中国語の説明が大体九割ぐらい理解できるまで、日本語が出来る中国語の先生について勉強するほうが効果的です。なぜかと言うとバイリンガルの先生について勉強すると、練習は先生と中国語でやりとりできるし、中級になるまでの文法と文型の学習は先生に生徒さんの母国語できちんと説明してもらえるし、一石二鳥で、効率が良く、早く習得できる学習法です。それはまるで車に乗って、旅行に行くように楽に遠い所まで行けます。そして、先生の外国語が上手であればあるほど、学習効果が良いのです。なぜかと言うと難しい説明は先生の中途半端の外国語(生徒さんの母国語)では、生徒さんが聞けば聞くほど、混乱します。そして先生が外国語が上手であると言う事は先生が外国語をマスターできる方法をきちんと把握している証拠です。英語がお上手な日本人学習者なら、正確且つ綺麗な英語で教える中国人の先生について勉強しても同じ効果が得られると思います。

2.日本人と中国人の気質の違い

日本人は職人氣質がある民族で、物事を処理するとき「品」を大切にす民族と言えますが、もう一方中国人は商人氣質がある民族で、物事を処理するとき、「福」を追求する事に中心を置きます。それは多分、日本は島国で外敵の侵略を受けた事がなかったので人々の心が落ち着き、集中して良いものを創ることが出来る環境が整っていたからで

はないでしょうか。それとは対照的に中国は、外敵の侵略が多かった上に、王朝の興亡も多かったため、人々は常に身の回りに戦争や災いの発生を心配していて、とにかく作りかけのものをさっさと仕上げたてし、早くそれらを換金しまおうという理由からかも知れません。

中国では普通の人とは勿論のこと、高級知識人、例えば大学の教授、医者、国家公務員なども、儲かる可能性が高ければ、気楽に職を変えて商売の道に入ります。そういうことは、同じ職業をしている日本の知識人になかなか出来ることではないと思います。

また中国人は移動しながら頑張って生きていく事に適応する民族です。中国人は「困った状況に陥ったら、とにかくほかの場所へ移動しましょう！」と思っています。理由は「木は元の場所から移動されたら枯れますが、人間は移動すれば移動するほどにその命が活かされる」と信じているからです。有名な「孫氏兵法」の中の「三十六計のうち逃げるが一番」という中国人の困った状況に対応する対策は、今でも強く生き抜いて行くための座右の銘として、中国人の胸に深く刻まれています。

事実、世界各国で大成功を収めた華僑達は、嘗て生活が行き詰まって別天地へ移り、また奮闘努力して成功した良い例です。これはまた中国人が移動に相応しい民族だという有力な証明でもあります。それら成功した華僑達は、「故郷に錦を飾る」という理念を持っているので、里帰りの際には、多量の援助金を差上げたり、学校や病院などの施設を建設したりすることによって、自分の移動のお陰、得た成果及び奮闘成功の歴史を次の世代に伝えるのです。

もう一方日本人は、日本国に堅守して頑張って生きていく事に相応しい民族だと思います。ブラジルへ移民した「日僑」の子々孫々が廉価労働力として日本に戻って来ているのが、その証拠の一つかも知れません。

日本人は個人のベースで外国へ移民して新天地を開拓するより、やはり団結して日本列島内で奮闘努力する方が成功のパーセンテージが高いようです。個人的な推測ですが、日本の独特な自然環境、食生活、温泉などは最高の栄養剤として日本人の体に流入し、最高に頑張れる「土」に転化して来たと思います。日本人にとっては自分に適したその独特な環境から離れて、外国の地で奮闘努力していく事は、相当辛いのではないのでしょうか？このため、海外では、日本の本社の支えの下で社員の団結力により成功した日本の企業が数え切れないほど多いのですが。逆に日本の企業文化と完全に切り離れて、海外で個人ベースで奮闘努力して成功を収めた日本人の企業家は、あまり多くないと思います。

3. 男尊女卑と男女平等

日本では「男尊女卑」の観念はまだ人々の心の中に深く根を降ろしていますが中国では「男女平等」の考えはもうごく普通になっています。男女は能力が同じなら平等に就

学、就職、昇進のチャンスが回ってきます。日本人と中国人の「男尊女卑」と「男女平等」の観念は大きく違います。

何千年続いた儒教の教えでは、一人の人間として女性は「温（穏やか）、良（善良）恭（恭しい）、?（儉約）、讓（謙讓）の美德を、男性は「仁（仁義）、義（義理）、礼（礼儀）、智（知恵）、信（信用）の美德を備えなくてはならないと提唱しています。また家庭内においては「夫為妻?」（夫の要求は妻の行動準則になる）、「父為子?」（父親の要求は子供の行動準則になる）という概念を注ぎ入れました。

日本人の儒教価値観は元々中国から取り入れたのですが、今でも日本人の行動範疇を大きく左右しています。でも、儒教の発祥地である中国では、新中国が設立してから、政府は男女平等を提唱し始め、孔子、孟子の教えは段々と捨てられてしまいました。新中国で生まれ育てられた女性達は、「男女平等」をモットーの下に、男性と同じ条件で進学、就職、結婚、出世できる社会システムに身を置き、次第に強くなって来ました。

日本では大多数の女性はどんな一流大学を出ても、会社での出世を目指すより、良い伴侶に恵まれ、幸せに結婚して、子供を生み育てる事が人生最大の目標と幸せだと思っています。言い換えれば、日本女性にとっては、社会上の価値より家庭内での価値の方がよっぽど重要だと思っています。しかし子育てが一段と落ち着いたら、パートの仕事を少しやったり、好きなお稽古事をしたりして別の人生の充実感を味わうこともあります。一方中国の女性は、始終家庭内での価値より社会上の価値を多く追求するのです。中国女性にとって一番怖いのは、社会から離れて行く事です。よって子供を生んでからも他人（手伝いさん）の手を借りながらも仕事に出るのです。中国女性の持論は「他人の手を借りても子供は大きくなっていく」のです。親子の血縁はこの何年かの手抜きで薄くなりません。それよりも自分は子育てのために社会から何年間か離れた挙句、社会の流れに付いていけない事の方がよっぽど怖いのです。よって子育てのために仕事を辞める事は殆どありません。特に大卒や名門大学を出た女性は、結婚する前もした後でも、大事な仕事を自ら辞めません。また会社からも子供を生む事で首にされた事例も、殆どありません。更に両親にいたっては、一所懸命エリートコースに乗せるまで育て上げた有能な娘の出世に対しても大きく期待しています。娘としてもその期待に背くことは出来ないのです。

私の二人の親友は、中国の一流大学を出て、結婚してからも大手会社に勤め、ご主人よりも良い給料を貰っていたのですが、シンガポールに来てから英語の問題で公務員や会計士の仕事に就けませんでした。彼女の親たちがシンガポールに来たとき、心の最大の痛みは、優秀な娘にちゃんとしている職がない事です。内の一人の父親は、娘がせっせと家事をやっている姿を見て、可哀想に思い、更には怒りを感じ、とうとう義理の息子に「俺の娘は才媛だったのに、貴君の所ではメイド扱いされているのではないでしょか!？」とかんかんに怒って、予定より早く中国に帰ってしまいました。お父さんの頭には「もし娘が中国にいたなら、こんな惨めな窮状に陥る事が無かつたらう!間違いなく高い給料をもらって、手伝いさんに家事を任せて、優雅な生活をしていたに違いない」

という画像が描かれていると推測できます。

もう一人の友人のご両親は、彼女の産後の手伝いにシンガポールに来ました。赤ちゃんが生まれて、まだ一ヶ月も経たないのに、早速彼女の夫に、「君は彼女の将来をどう考えてあげていますか？彼女をずっとそのまま家に閉じ込めるつもりですか？良い仕事に就くためにもっと研修や勉強させるほうがいいのではないのでしょうか？」と命令に近い提案をしました。

日本人にとっては、そのお父さん達の発言を理解しにくいかもしれませんが中国の教育背景を知っていれば、理解出来るかもしれません。

中国での大学は私立の大学がなく全部国立大学です。受験生は男女を問わず4～6%の激しい競争率で大学に入ったのです。本人を合格させる為の親のサポートも大変なものですから、その分期待も大きいのです。また中国社会も、女性が出世できる土台が出来ているので、更に娘達の出世に対する期待を助長したのです。それとは別途に娘のいる中国人の親はみんな職を失った娘の家庭生活に対して、もう一つの共通する心配を持っています。それは中国の何千年の封建文化と関連がありますのでまた別の機会で述べさせていただきます。

さて男女平等を提唱している中国の会社内部ではどういう様子でしょうか？中国は何千年も続いた科挙制度の影響で、学歴が絶対に物を言う社会になっています。よって会社では、仮に男性であっても学歴が低いければ、学歴の高い女性より給料が低いのが当然です。男性諸君も、学歴も給料も自分より高い女性上司の下で働くことに対して、何も不自然と思いません。家庭内でも、夫の学歴が低く、妻が学歴が高ければ、給料は間違いなく妻のほうが高いし、家庭内の主導権は妻が握ります。では、男女が同じ学歴ならどうなるのでしょうか！それはさすがに男性のほうが出世が早く、昇給も早いのです。

中日国交回復以来、両国の交流は日進月歩の深まりと拡大を見せています。両国の男女間の国際結婚も段々多くなってきています。日本人男性と結婚した中国人女性の共通の不満は、日本男性が亭主関白で家事を手伝わない事です。一方中国人男性と結婚した大多数の日本女性はご主人が家事をやる事を、内心では喜んでいますが。

日本社会の男女平等はともかくとして、私の観察では、日本人の家庭内では、外と内の役割分担がはっきり分かれています。夫婦の平等関係は、まるで手を握り締めた二つの拳骨(げんこつ)のようです。左の拳骨は妻で、家のすべてに責任を持ってやるし、右の拳骨は夫で、外で仕事をして稼ぎます。お互いに手の中の職責を握っていますが、お互いを自分の拳骨の中には入れないのです。即ち外部でバランスよく均衡を保っています。夫は家で何もやらない代わりに、妻の担当する部分(家でのあれこれ)にも文句を言わないし、その上、大多数の日本人男性は妻がパート仏で稼いだ収入を期待したり、当てにする事も殆どありませんし、妻も夫の仕事には口を出さないのです。

一方、中国の夫婦関係は、手を開いたまま両手をくっ付けた形のようなようです。夫と妻の親指はともに家の稼ぎを分担し、妻の人差し指は食事を作る役割をし、夫の人差し指は茶碗洗いの役割を担います。妻の中指は買い物をし、夫の中指は洗濯をします。指の一本一本は、全部平等にそれぞれの役割を分担しているのです。勿論夫婦の手の中の状況は、お互いにとって一目瞭然です。家事の処理も、仕事の対策も、一緒に相談した上でこなしていくのです。また夫婦双方は、社会での出世と高収入をお互いに期待しているし、うまく行ったらお互いに誇りを感じあうのです。

中国人男性が家事全般において、如何に得意げに振舞うかを日本男性が知ったなら、多分哑然とするに違いありません。日常用品の購入、料理、掃除洗濯、アイロンかけ、子供の学習指導とお世話、妻の看病や産後の世話……。ここまで読んだら、日本人男性は「これ程家事を助けたら、いい仕事が出来ますかね？」と疑問に思うかもしれません。確かに中国の市場経済導入に従って、中国でも私営企業や外資系企業がだんだん多くなり、そこに勤めている男性、或いは自分で会社を営んでいる男性は、さすがに上記のように、多く家事を手伝えなくなりました。そこで貧富の差が依然大きな中国では、夫のやらない分をお手伝いさんに分担して貰って、家事が全部妻に行かないようになっていきます。それでも大多数の中国の男性諸君が家事から解放される日はまだまだ遠いでしょう！

私も日本人と結婚した当初は、彼が家事をしない事に随分と腹が立ちましたが次第に慣れました。シンガポールに住んでから、Mのヘルプを得ながら何とか家事と仕事を両立させています。

私は、個人的には家事は出来る範囲で夫婦で分担するほうが良いと思っています。なぜかと言うと家事をする事は男の老後の痴呆症防止に良いし、妻も喜ぶし、万が一妻が体調を崩して入院したとしても、夫は身の回りの不自由を感じないでしょう。まさに、「一石三鳥」だと思うからです。

4. 集団行動と個人行動

私の思うには、日本民族は、助詞や助動詞で繋いでいる「粘着語構造」の日本語と同じように、一つの線で繋がれ、個人の単独行動で物事を決めるより、周りのサポート役と一体になって物事を動かす事に長けています。それとは反対に中国人は、「独立語構造」の中国語のように、一人一人自由に動き、物事を動かすとき、周りとの連携より、個別行動のほうが得意です。例えば大多数の日本人は独立した知人を、「これからは大変でしょうね！」と心配や否定の目で見るのが普通ですが、中国人は日本人とは逆に、「いいですね！金儲けの第一歩を出して、きっと成功するわ！」と肯定と励ましの目でみられます。

日本人は、基本的に会社を変える事に抵抗を感じますが、大多数の中国人は何年も同じ会社に勤めたら、周りから「変化と進歩が無い」と思われ、自分自身も納得のいかな

い気持ちになるのです。とにかく中国人は集団に属すより、個人行動を好み、静止するより動きながらチャンスを探すほうが良いと思い、きちんと綿密に物事を処理するより、多少いい加減でもいいから融通が利くほうがお互いにやりやすいと思う民族なのです。近いようで遠い中日両国、人々の発想、価値観、物事の処理の仕方及び言葉の構造など、正反対といって良いくらい違うのです。スムーズな交流を行うためには、お互いの違いを認識して、相手の考え方を理解するのが秘訣だと思います。以上、簡単ではありますが、日本人と中国人、日本語と中国語の世界に長年身を置きながら感じた事を率直に述べさせて頂きました。皆様の中国人に対する理解に、多少ともお役に立てば幸いです。最後に少し私の学校の紹介です。www.chinalingua.edu.sg/

少人数制で徹底的に授業指導を行います ハワイからきた留学生、中国語も中華料理も大好きです



イングリッシュスピーカーのキッズの中国語



開校式で中国語でスピーチする Mr. 池田



趙 玲華 (ちよう りんか)

中国・北京生まれ

北京第二外国語大学日本語科を卒業。

観光出版会社で編集と翻訳業務に従事。

日本企業で6年間、技術移転と貿易業務にかかわる通訳と翻訳を担当。

早稲田渋谷高等学校中国語講師、在星日系企業の中国語講師を経て、

2003年6月よりChinalingua School 「文中苑」を開校する。